Doshisha University Center for the Study of the Creative Economy
Discussion Paper Series No. 2018-08

東日本大震災からの復元力としての郷土芸能
～郷土芸能劇「唐桑ものがたり」に着目して～

松野光範

Discussion Paper Series

東日本大震災からの復元力としての郷土芸能
～郷土芸能劇「唐桑ものがたり」に着目して～[1]

松　野　光　範[2]

はじめに

初めて気仙沼市唐桑町を訪れたのは 2013 年 8 月末のことであった。その後、2015 年 9 月まで、半年に 1 度夏休みと春休みに復興支援のための学生のボランティア活動を支援するとともに、復興の状況を視察し、吹田市を中心に気仙沼の復興の様子をパネル展示等で発信してきた。時間の経過とともに関西地区では東日本大震災について報道される機会が減少し、関心が薄くなっていたことによる。

気仙沼市内はもちろん、広域合併による旧本吉町や旧唐桑町を含め全域を回ったが、唐桑に来て驚いたのは、気仙沼市内の復興に比べスピードが早いことであった。宿浦地区にある早馬神社の梶原禰宜によると、唐桑の中でも大きな被害を受け地区であり、開催は難しいのではと考えていた秋の例大祭を開催することができた。さらに、唐桑観光協会の小松事務局長から、唐桑は郷土芸能が盛んな地区であり、たとえば大漁唄い込みは浜ごとに詩や節回しが微妙に異なり、御崎神社の祭礼には虎舞が披露され、女性だけで演じられる七福神舞や宴会で披露される浜甚句などがある。さらに。これら郷土芸能と地域の歴史的な伝承などを取り入れた郷土芸能劇「唐桑ものがたり」が毎年 12 月に気仙沼市民会館で上演され、翌年の 3 月には仙台で定期公演が開催されていることであった。事務局長の奨めもあり 2016 年 3 月の公演を視察する機会を得たが、出演者の楽しそうな笑顔と会場の盛り上がりが印象的であった。

これらのことから、大震災からの復興というと経済的な側面ばかりが重要視されがちであるが、生活に根差した文化である祭りや郷土芸能、これらをベースにした郷土芸能劇などの創造的活動によるコミュニティの再生が復興のスピードを加速させているのではないかとの仮説から、継続的にインタビューを中心とした調査を実施した。

本論では、唐桑における郷土芸能、特に郷土芸能劇「唐桑ものがたり」について、東日

---

[1] 本論文は日本学術振興会の「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（H27.10～H30.9)」の成果の一部である。
[2] 同志社大学ライフリスク研究センター　嘱託研究員。

本大震災からの復元力という視点から整理を行う。

1.　気仙沼市唐桑町について

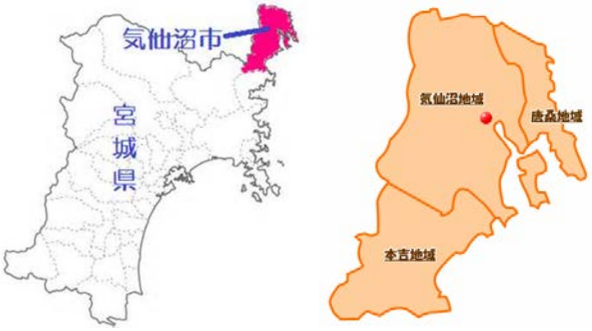
（１）唐桑町の地勢的な位置など

気仙沼市唐桑町は、図１のように宮城県の最北東端に位置し、太平洋に突き出し半島となっており、三陸のリアス式海岸の一翼を形成している。北は岩手県陸前高田市に接し、豊饒の海「広田湾」の南岸を形成している。東は太平洋に突き出した形となっており、西は気仙沼大島が防波堤の役割を果たし唐桑瀬戸と呼ばれる穏やかな海で牡蛎やホタテの養殖が行われている。

沖合の黒潮と親潮の潮目はプランクトンが豊富で、世界でも有数の漁場となっており、三陸沿岸には気仙沼をはじめ大きな漁港があり、黒潮に乗り北上するカツオやマグロ、親潮に乗り南下するサンマやタラなどの主要な水揚げの基地となっている。

さらに、平泉の黄金文化を支えたのは気仙地区[3]の金とされており、唐桑にも「金取浜（かねとりはま）」と呼ばれる湾の「あずれヶ浜」という入江の北側に奥行き 50mにおよぶ横坑が残っている。また、「中の浜」「馬場の浜」「韮の浜」や「青の沢川」には砂金採取の痕跡がみられる[4]。

図１：気仙沼市の位置関係



（２）町名の由来など

町の名前の由来は、唐の国から桑の木を満載した船が嵐で遭難し、積荷の桑の木が神止浜(かどまりはま)に流れ着いた事から唐桑と呼ばれるようになったと伝えられている。

加藤（1994）によると、諸説あるもののいずれの説も唐からの渡航船が桑や鍬を運ん

[3] 宮城県北東部および岩手県南東部にまたがる広い地域であり、現在の宮城県気仙沼市および本吉郡、岩手県大船渡市、陸前高田市を含む地域であり、江戸末期には仙台藩に属していた。
[4] 加藤（1994）pp68－77.

できたからと伝えており、文字については唐鍬もしくは唐桑の文字があてられてきたとしている。さらに、このことは地名発祥の由来にとどまらず藤原秀衡の時代（1157～1187年）には宋との交易ルートが日本海だけではなく、太平洋側の沿岸航路が開拓され気仙沼・唐桑湾を利用していた可能性を指摘し、海から文化が流入してきたとしている。

また、太平洋沿岸海路は、北上する黒潮に乗って鰹の群れを追いかけてきた紀州の漁師たちよって開発され、唐桑には近畿地方の言葉訛りが残っているという。1300年前に熊野神を室根山に勧請した人たちが、唐桑に定住し同化したとされるが、紀州のリアス式海岸とよく似た地勢の唐桑は定住しやすかったものと考えられる。

（３） 人口の推移と高齢化

2006年（平成18年）3月31日、気仙沼市と合併し唐桑の名前を残し気仙沼市唐桑町となった[5]。唐桑の人口は、2000年（平成17年）10月1日の国勢調査時は人口8,841人であったが、2010年（平成22年）の国勢調査では7,420人、2015年（平成27年）は表1にあるように6,276人と過疎化に悩む地域でもある。各地区の人口減少率[6]は、気仙沼地区が11.6%、本吉地区が7.7%であるのに対し、唐桑地区は15.0%と最も高い水準となっている。

表１：気仙沼市の人口と世帯数

	平成27年人口			平成27年	平成22年から平成27年		1世帯人数
	総数	男	女	世帯数	人口増加数	世帯数増加数	
気仙沼市計	64,988	31,772	33,216	24,152	△8,501	△1,305	2.69
気仙沼地区	48,695	23,838	24,857	18,828	△6,519	△1,126	2.59
唐桑地区	6,276	3,053	3,223	2,039	△1,144	△164	3.08
本吉地区	10,017	4,881	5,136	3,285	△838	△15	3.05

出典：平成27年国勢調査の人口・世帯数の速報より筆者作成

さらに高齢化率（人口に占める65歳以上の人口の比率）は、表2に示したように気仙沼市全体が34.7%であるのに対し、唐桑地域39.5%と気仙沼地域・本吉地域と比べ5%前後高い比率で進行している。平成22年から平成27年の推移を比較すると、唐桑地域+5.3%、気仙沼地域+3.9%、本吉地域+3.8%となっており、高齢化の進行が早いことが指摘できる。

[5] 当初は、本吉町を含む1市2町の合併であったが、本吉町が議会の反対で離脱したものの、2009年（平成21年）9月1日に合併し、現在の気仙沼市を形成している。

[6] （平成22年人口―平成27年人口）÷平成22年人口で算出。

表 2：気仙沼市の地区別高齢化率

	平成22年国勢調査				平成27年国勢調査			
	気仙沼市合計	気仙沼地区	唐桑地区	本吉地区	気仙沼市合計	気仙沼地区	唐桑地区	本吉地区
年少人口（15才未満）	8,746	6,666	719	1,361	6,579	4,967	494	1,118
生産年齢人口（15才から64才）	42,004	31,700	4,162	6,142	35,264	26,547	3,302	5,415
老年人口（65才以上）	22,600	16,723	2,538	3,339	22,709	16,777	2,477	3,455
高齢化率	30.8%	30.4%	34.2%	30.8%	35.2%	34.7%	39.5%	34.6%

出典：平成 27 年国勢調査の人口・世帯数の速報より筆者作成

（4） 熊野神勧請

718 年（養老 2 年）鎮守府将軍大野東人（おおのあずまんど）は、海道蝦夷（えみし）征討の任についていたが、蝦夷は強靭で容易に征服することができず、元正天皇に当時天下第一とされていた熊野神の加護を願い出た。元正天皇はこの願いを許し、東北の地に熊野神の分霊を祀ることを命じた。この命を受けた、従三位中将鈴木左衛門尉穂積重義らは、紀州三輪崎の浜を 4 月 19 日に船出し北航すること 5 ケ月、9 月 9 日に唐桑の細浦（現在の鮪立）に着いた。到着後、熊野神は業除（ごうのけ）神社に安置し、対岸の舞根（もうね）にある瀬織津姫（せおりつひめ）神社を経て、現在の気仙沼市内を抜け、気仙沼と一関の県境の笹塞（ささふたぎ）峠を経由し当時の鬼頭山（おにこべやま）に祀られた。その後、鬼頭山は紀州の群名をとり牟婁峰山と呼ばれ、現在の室根山に改められた。

室根神社は、閏年の翌年の陰暦 9 月 9 日に大祭が開かれるが、この祭りは国の重要無形民族文化財に指定されており、東北三大荒まつり [7]の一つとなっている。熊野本宮大社九鬼宮司によると、祭の様式は伝統的な熊野の様式に則っている [8]とのことであり、唐桑と気仙沼に祭りの口開けに、ご神体を洗い清めとともに勧請達成に導いた海神に感謝と畏敬のための「お潮汲み役」が代々受け継がれている。

なお、唐桑地区には表 3 に示したように、業除神社と瀬織津姫神社を加え 9 つの熊野神社があり、鮪立の古館家（鈴木家）は熊野神勧請の指揮をとった従三位中将鈴木左衛門尉穂積重義の末裔と伝えられている。鮪立の丘の上に古館家の屋敷があり、居間からは常に海が見え、竈は常に火を絶やさず、大鍋に湯が沸いている。震災の際にはこの大鍋が被

[7] この祭は、旧態を固く伝承し継続されており、その祭事に奉仕する神役は古の神役の末孫がこれに当っており、その範囲は一関市（室根町、大東町、千厩町、川崎町）は勿論、大船渡市、宮城県気仙沼市および唐桑町に及んでいる（一関市 HP より

[8] 2016 年 10 月、熊野本宮大社九鬼宮司へのインタビューによる

災者の炊き出しに役立ったという。2011 年秋の熊野地方の水害の際には。唐桑にいち早く震災支援の手を差し伸べた新宮市に、2t トラックに米など支援物資を積み、当主の鈴木伸太郎氏と事務局長の戸羽氏、鮪立大漁唄込保存会の畠山氏が駆けつけたとのことである。

唐桑に熊野神が到着した際の仮宮である業除神社と室根への出発まで安置された瀬織津姫神社を含め、９つの熊野神社が祀られ、熊野地方との深い縁を物語っている。(表 3)

表 3：唐桑地区の熊野神社

NO	神社名	所在地	由　　緒
1	熊野神社	上小鯖 80	勧請年代不明 小山氏の祖先が南方より移住の際に熊野神社を勧請
2	熊野神社	中前田中 281	勧請年代他不明 講組織で祭りを行っていた
3	業除神社	鮪立	紀州より勧請の熊野神が鮪立港に到着した際の仮宮供物を塩水で清め、釜を据えて湯の花を捧げたことから「釜の前」の地名が残る
4	熊野神社	宿熊ノ林馬場 119	勧請年代他不明 熊ノ林の地名は熊野神が舞根の仮宮に在した折、お供の人々の宿となったことに由来
5	熊野神社	東舞根	県道整備により参道が遮断され階段が設置
6	熊野神社	西舞根	高台移転の舞根陽向台団地の東端に位置
7	瀬織津姫神社	西舞根	紀州の使者湯浅権太夫の母が途中で亡くなり、十一面観音像と鏡を海に投じたところ、舞根に流れ着き、母の御霊とともに祀られた 熊野神勧請は室根出発の 9/19 まで祀られた 被災し元の場所から数百ｍ山手に移築
8	熊野神社	只越大畑 54	江戸時代に設置 国道 45 号線開通の時に移築
9	熊野神社	大沢荒谷前 182	勧請年代その他不明 高台移転により現在地に移築

出典：唐桑大漁唄込復活推進実行委員会戸羽事務局長が唐桑町史および実見した資料より

（５） 唐桑の産業

唐桑半島は漁業が盛んで漁業が盛んで、カキ，ワカメ，ホタテ貝などの養殖漁業をはじめとし、定置網漁や小型漁船によるイカナゴ漁、アワビやウニの採取が行なわれている。遠洋漁業の乗組員も多く、最盛期には 1,600 人もの唐桑出身の漁船員(町内全世帯の 70%)がマグロを追い世界の海で活躍したといい、今でも多数の人が従事している。1 年近くを洋上で稼ぎ、家族を養うとともに唐桑御殿といわれる入母屋式の大きな家を建てることが男たちの夢であった。その間留守を預かる家族は、自家用野菜の栽培と大漁と航海安全を願い様々な習慣や郷土芸能を今でも日々の暮らしの中に残している。

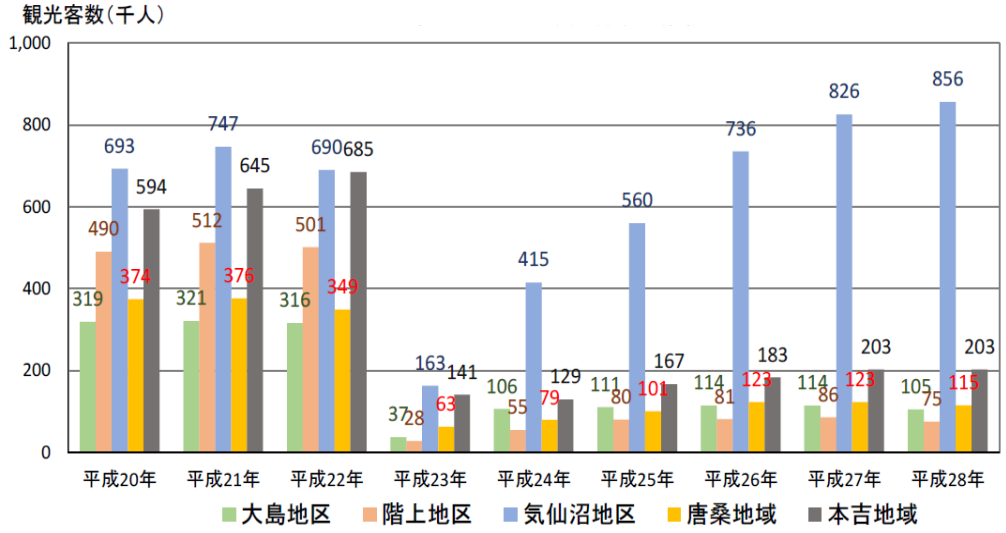
暖流である黒潮の影響で冬も比較的温暖であるが、海に突き出した半島のため平地がほとんどなく、稲作はほとんど行われていない [9]。リンゴなどの果樹栽培や自家用の野菜の生産が主で地域の特産品としては桑の葉を煎じた大唐桑茶、大唐桑パウダーや桑を練り込んだうどんやパスタ、桑の実のジャムなどがあり、1980 年代の一村一品運動に象徴されるまちづくりブームであったが、唐桑ではまちづくりカンパニーなどのユニークな取り組みもあったが、小規模なビジネスに留まったようである。

観光の目玉として整備された高台の漁火パークは三方を海に囲まれ、気仙沼大島などアリアスの風景を眺めることができ、海に上る朝日と山に沈む夕日、広田湾に面する大理石海岸、岬の先端には御崎(おさき)のリアス式海岸の奇岩奇勝や東海岸に巨釜・半造がある。半島全体にタブやツバキが群生し北西部には天然記念物の九九(くぐ)鳴き浜があり、半島の大部分が陸中海岸国立公園に指定されており、東日本大震災後に三陸復興国立公園に名称変更された。市営の古い国民宿舎はあるものの、改修の計画はなく、大きな旅館はなく、家庭的なもてなしの民宿があるものの、高齢化により後継者の問題を抱えている。

震災後、唐桑観光協会では関係者を対象に。JTB 関連会社の研修や指導を受けエコツーリズムなどのパンフレットを作成し、新たな観光開発に取り組んできた。しかしながら。気仙沼地区への観光客の入込数は、図 2 に示したように震災前の水準を大きく上回っているものの、大島、階上、唐桑、本吉への入込数が大幅に減少し、唐桑地区は平成 22 年の 685 千人から平成 28 年の 203 千人と 30%弱にとどまり、回復基調とはほど遠いことを示している。

[9] 確認できたのは千葉氏 1 軒のみ

図２：気仙沼地区別観光客の推移



当初は、研修内容に従い郷土芸能体験などをメインにしたエコツーリズムに取り組んでいたが、思うような集客はできず、環境省の主宰する「みちのく潮風トレイル」の唐桑コース、「宮城オルレ」の唐桑コースなどのトレッキングのためのフットパス整備が完了したところである。

さらに、熊野神勧請の物語をトレッキングコースに結び付けることについて、熊野古道は黒潮に乗り唐桑・気仙沼・室根へ続いているという歴史物語をどのように観光ビジネに活用していくかをテーマに取り組んでいる。調査の過程で、奥州藤原氏の戦勝祈願のための室根神社への参詣ルートが表参道として整備・保存されていることが判明した。これにより、平泉・一関と県をまたいだ広域連携[10]を可能性について模索しているところである。「みちのく潮風トレイル」「宮城オルレ」の唐桑コースが海岸沿いの道であることから、一関・平泉からの山越えの道として、世界遺産である熊野古道のノウハウを活用すべく取り組んでいる。

（６） 唐桑人（びと）の特性

三方を海に囲まれ、一方は山が迫る唐桑半島は、国道が開通するまでは、海上交通が主要な手段で、陸の孤島といわれていた。

熊野神を勧請し鮪立に居住した古館家の入り口に図３のような顕彰碑が立っている。

10 平泉町・一関市・気仙沼市の観光戦略には震災以前より広域連携が掲げられているが一向に実現していない。南岩手・北宮城の観光連携会議が存在するが、広域のパフレット作成と HP の開設および連絡会議の開催に留まっているのが現状である。

これは、江戸時代に網元である古館家が鰹の溜め釣り（現在の鰹一本釣り漁）を周囲の反対を押し切って導入し、三陸一円にこれを広め繁栄の基礎を作ったことを称えたものである。紀州の民は、熊野灘を乗り切る頑丈な造船技術や岸伝いに北上する巧みな操船技術に長け、鰹を追い北上を続け、風待ちや補給のために立ち寄った港で物々交換をするだけではなく、保存食としての鰹節の製造技術や醤油の醸造などを太平洋の沿岸地域に伝えた。黒潮にのり北上した紀州の民は、当時最先端であった鮮魚の加工技術と交易を広めたハイテク集団であったと考えられる。そして、唐桑の人たちはそれらの技術を積極的に取り入れ自分たちのものにするという好奇心と才能を持ち合わせていたものと思われる。

また、これを漁業面でみるなら、近年になり定置網や鰹の溜め釣り漁法を行っていた豊かな近海の資源の減少を補うために、造船技術や操船技術の進歩に支えられ世界の海へ漕ぎ出していった。その結果、相手国の資源の減少に伴う反発や、1970 年代の 2 度のオイルショックに加え 1982 年には国連海洋法条約が採択されたことにより減船を余儀なくされた。現在でも 800 名ほどが全国の船主の船に乗り組んでいるといい、住民のパスポートの取得率は日本で一番多いと聞いている。震災の際には、唐桑の船員が乗り組んでいる宮崎県などの遠方の船主から乗組員の家族の安否の問い合わせがあったとの事であり、気仙沼は遠洋漁業のための人材の供給基地となっている。

図 3：三陸地方　鰹一本釣り発祥の地の碑と碑文

延宝３年（西暦1675年）に鮪立古館の先祖鈴木勘右衛門は、溜め釣り鰹一本釣りに来ていた紀州の舟５艘と漁師約70名を迎え入れて、三陸沿岸にこの漁法を導入することを試みた。そのとき周囲からは村の生活を脅かすものと強く反対されたが、末には必ず村の重宝になると仙台藩に訴え続け、村の子供にまで習得させることでこの漁法が定着することとなった。勘右衛門は権力に屈せず庶民の助けになり、ひいては藩の為世の為になる最良の方法と信じ、一歩も退かず断乎として信念を貫いたのである。その後の三陸地方の漁業の発展を考えるとこれは画期的な出来事であり、唐桑の最も誇りとするところである。
鮪立大漁唄込保存会結成35周年に当り茲に鈴木勘右衛門の業績を顕彰し記念碑を建立するものである。

平成22年10月吉日
鮪立大漁唄込保存会一同

筆者撮影

このような市場環境の大きな変化に積極的に対応するとともに、牡蠣やホタテの栽培漁業が盛んな地域であり、海の富栄養化への取り組み、たとえば畠山重篤氏が主宰する NPO 法人「森は海の恋人」の植林による環境保護活動は 2018 年 30 回を迎えた。唐桑半島には宮城県の魚付き保安林の標識が立てられた松林が多数存在している。明治のころか

ら半島内での植樹が始まり、これが小学校の教材にも採用されていることから、唐桑人は森と海の関係については古くから気づいていたものと思われる。

調査していて「浜はオリンピック方式」という言葉をよく耳にしたが、以上のことから唐桑人の特徴は、進取の気性に富み外向的で何事にも敏感に反応し、決断が早く行動的であると指摘できる。

2. 郷土芸能劇「唐桑ものがたり」

（1） 唐桑の郷土芸能

① 気仙沼市の指定無形民俗文化財

気仙沼市における指定無形民俗文化財は表 4 に示したように、国指定のものが 2、県指定のものが 5、市指定のものが 8 合計 15 の無形民俗文化財が指定されている。田植え踊りから大漁唄込、鹿踊り、獅子舞そして虎舞と、多様な郷土芸能が指定されているが、室根のマツリバ行事や羽田のお山がけのように山のもの、田植え踊りや鹿踊り、大名行列のような里のもの、そして大漁唄込や七福神舞、虎舞のような海のものがあり、海里山の郷土芸能が揃っていることが気仙沼の特徴である。

半島が海に突き出した地形の唐桑地域には、海に関わる郷土芸能が伝えられている。また、田植え踊りや獅子舞などの神楽、虎舞などは、正月や祭礼の際に奉納されるハレの日の郷土芸能であるのに対し、大漁唄込は本吉地域の大谷地区などでも唄われ、三陸一帯の沿岸の漁の際の作業唄として唄い継がれてきたケの日の郷土芸能であり、浜ごとの詩や節回しが微妙に異なっている。また、大漁を知らせ、入港を待つ家族に水揚げの支度を促す通信手段としての役割も担っていたようで、網起こし作業の際に唄われる日常の作業唄であったが、地域の慶事などでも披露されハレの日の歌としても歌い継がれている。これらを集約したともいえるのが気仙沼地域で唄われている「どや節」であり、さらに三陸地方の民謡と思われている、歌謡曲の「斎太郎節（さいたらぶし)」として知られている。

唐桑には、その他に宴席で相互に繰り返す浜甚句があり、浜ごとの浦祭りの時、神事の後宴席などで歌われていたが、時代の推移と共に歌われる機会が少なくなったようで、現在「唐桑浜甚句保存会」を結成して、浜甚句にあわせた手踊りも加わり次代への伝承活動を展開している。その他に、享保年間に伝承された大漁五穀豊穣祈願の宿打囃子と獅子舞、明治後期に大船渡市末崎町にある熊野神社から伝えられた松圃虎舞は打ち囃子と娘手踊りが特徴で、女性だけで演じられる小鯖神止七福神舞や、子供が演ずる只越七福神舞な

ど多様な郷土芸能が伝えられている。

表 4：気仙沼市の指定無形民俗文化財

	名称	地区	由来など
国指定	室根神社祭のマツリバ行事	一関市室根町・気仙沼市	一関市室根町・気仙・本吉地方の氏子が世襲の役目やしきたりに従って奉仕地域の五穀豊穣や無病息災を祈願
	羽田のお山がけ	赤岩上羽田	毎年旧暦8月15日、16日に7歳の男児が羽田山に登拝し、無事成長を祈願
県指定	新城の田植踊	和野・立沢・金成沢	天保年間（1830年から1843年）大凶作の時、平八幡神社へ豊作祈願したのがはじまり
	早稲谷鹿踊	早稲谷	文政10（1827）年大東町大原より月立八瀬に伝承「八つ鹿踊」の魔除け踊り
	廿一田植踊	上廿一・下廿一	明治初期、黒川郡方面から伝承 技芸も優れ、装束や芸態に地域の特色
	松圃虎舞	唐桑町松圃	明治後期、大船渡市末崎町の熊野神社より伝承し打ち囃子や娘手踊りが特徴
	浪板虎舞	浪板	太神楽の獅子舞が虎に代わったもの三陸沿岸に多く伝承の虎舞と同系統
市指定	山田大名行列	本吉町山田	文政4（1821）年、御嶽神社に疫病流行の際の祈願が始まり 天下泰平、五穀豊穣、無病息災
	塚沢神楽	塚沢	南部神楽の流れで太鼓と鉦の音民謡調のせりふと舞い振りにより物語が進行
	小鯖神止り七福神舞	唐桑町上小鯖	昭和23（1948）年から、留守を預かる婦人たちが舞う女性だけの七福神
	宿打囃子獅子舞	唐桑町馬場	享保年間（1716－1735）に伝承 大漁五穀豊穣を祈願するため奉納 打ち囃子に合わせて、2組の獅子舞
	只越七福神舞	唐桑町只越	江戸時代末期、只越地区に伝えられた古風な形を残しており、地区の漁師たちによって大漁を願って舞われていた
	鮪立大漁唄込	唐桑町上鮪立	江戸初期、鰹一本釣り伝来当時から唄われた作業唄で、大漁を知らせ、水揚げ支度を促す伝達手段の役割も果たす
	岩井崎明戸虎舞	波路上原・後原	明治期に伝来、躍動感ある虎舞や、抜きバチと呼ばれるダイナミックな桴捌きや手踊りなど、芸態や演技に独創性
	崎浜大漁唄込	唐桑町崎浜	「前唄」と「後唄（本唄）」からなり、鰹船は「ユイドハー」で大謀網は「ヨイドコラサ」と掛け声が異なる

出典：気仙沼市 HP を筆者が表に整理

② 三陸海の盆

三陸地方では、2011 年の東日本大震災の発生以降、毎年 8 月 11 日の月命日に犠牲になった人々を偲び、震災の悲劇を永遠に忘れないことを目的に、地元の郷土芸能の競演行事「三陸海の盆」が、NPO 遠野まごころネット [11]などが支援

[11] 遠野まごころネットは、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災で被災した岩手県沿岸部の被災者を支援するべく、遠野市民を中心として結成された被災地支援団体。岩手県遠野市は、東北自動車

し、表 5 のように三陸一帯で毎年開催されている。

表 5：三陸海の盆開催地

	開催地
2011年	岩手県大槌町
2012年	岩手県釜石市
2013年	岩手県大船渡市
2014年	岩手県山田町
2015年	宮城県気仙沼市
2016年	宮城園南三陸町
2017年	岩手県宮古市
2018年	宮城県石巻市

出典：NPO 遠野まごころネット HP より筆者作成

2015 年には気仙沼市唐桑町の御崎観光港で開催され、松圃虎舞、大谷大漁唄込、神止七福神舞、鮪立大漁唄込、唐桑浜甚句、崎浜大漁唄込が参加した。すべての回に参加している崎浜大漁唄込保存会は、第 6 回の南三陸での開催に、劇団「夢の海」のメンバーとともに郷土芸能劇「唐桑ものがたり」のストーリーを演ずるなど、そのネットワークを三陸一帯に広げている。

③ 地域における文化の役割

震災からの復興においては、まずは経済の再建が優先されがちであるが、佐藤（2016）は文化力を「人々に元気を与え地域社会全体を活性化させて、魅力ある社会づくりを推進する力」と定義し、地域活性化と文化力の関係を、表 6 のように整理している。

表 6：地域活性化と文化力

活性化の分野	方策	効用
地域経済を活性させる文化	文化施設の利用、文化財保存・活用	消費の拡大、観光等による交流人口の増大
	余暇関連産業・映像情報産業など経済のソフト化・サービス化	新たな需要の喚起、知識集約産業として雇用創出
観光資源としての文化	歴史や伝統に基づく文化	国内外への発信
	特色のある地域づくり	地域の魅力を高める
教育や福祉などの分野でも大きな効果をもつ文化	子供たちが本物の文化芸術に触れる	豊な人間性と創造性を育む
	文化芸術活動への参加	感性を磨き、他社との共感を育む自己形成やコミュニケーション能力を伸ばす
	高齢者の福祉活動に文化芸術を取り入れる	新進の健康の維持。増進

出典：佐藤一子『田園回帰⑦地域文化が若者を育てる』p28

道や東北新幹線沿いの内陸地域と宮古・山田・大槌・釜石・大船渡・陸前高田などの沿岸地域との中間地点にある地理的状況を生かし、内陸と沿岸を結び、物や人や情報が集まって行き交う HUB(ハブ)として長期に渡る物資および人的支援をめざしている

地域文化で経済を活性化するということは、即効性のある処方箋ではないことは、上述の唐桑の郷土芸能体験をエコツーリズムにという試みが示したとおりである。しかし、佐藤が指摘するように、少子高齢化と過疎化に悩む農山漁村にとっては、まず足元の民俗文化や景観、文化財などを見直し、地域文化の創造的発展の可能性を見出すことは極めて重要であるとともに、地域の誇りを取り戻す機会ともなる。

その意味で「三陸海の盆」は、犠牲になった人々を偲ぶ機会であるとともに、被災した地域の文化的交流を通じたネットワークを形成しながら人々の生活を立て直し、希望を共有する試みと評価できる。このような活動の中で人が育ち、世代間交流が行われるとともに、共感や信頼形成に加え地域に対する誇りが形成されると考えられる。次節では、唐桑で行われている郷土芸能劇「唐桑ものがたり」について報告する。

（２） 分断された人々をつなぐ郷土芸能劇「唐桑ものがたり」

2013 年 5 月 21 日の三陸新報に「海と生きる地域表現」という見出しの記事が掲載された。内容は、11 月末の郷土芸能をベースにした物語の上演にあたり唐桑で町民劇団の団員を募集するというものであった。SEEDS Asia[12]のメンバーで劇団「夢の海」を主宰し、芝居の脚本・演出を担当している栗原氏は、この取材で「伝統芸能をベースにした物語を演じることによって、住民が伝えてきた思いを最大限知り、表現することができる。唐桑が復興していく中で、子供たちが『地域を守る』意識を持つきっかけになれば」と答えている。

「大漁唄込」「浜甚句」「七福神舞」などは浜ごとに節回しや歌詞が微妙に異なり、それぞれの地区（浜）で演じられ、交流はほとんどなかった。さらに事務局長の戸羽氏によると、浜毎に独自の歌詞や節回しが受け継がれている「大漁唄込」は紀州からの伝承であると伝えられていたが、和歌山県に出向き調査したところ、類似の節回しや歌詞は発見されず、固有の唄の可能性が高いという。したがって、作業の際の掛け声に節や唄がつきそれぞれの浜を中心発展した可能性が高い。また、浜ごとに唄い継がれたもので、異なる浜が

[12] SEEDS Asia は、「人間の安全保障」「防災と開発」「環境管理」「コミュニティ防災」をキーワードに、アジア太平洋地域で活躍する NGO で、気仙沼では気仙沼復興協会（KRA）の仮設コミュニティでの活動の支援から入り、劇団「夢の海」の立ち上げ、郷土芸能劇「唐桑ものがたり」の創作活動および劇のプロデュース、資金提供や気仙沼市における防災教育の支援を行っている

共同で漁をすることはなく、一緒に演ずる機会はなかったようである。浜は早い者勝ちのオリンピック方式との説明を受けたが 、漁業だけではなく郷土芸能の面でも浜ごとに競い合い歌い継がれ、浜ごとの節回しや詩が形成されてきたようである。

それを震災後にボランティアや自衛隊が唐桑を去る時にお礼を込めて披露したという。複数の団体が共に演ずるなど、これまであまり繋がりのなかった郷土芸能団体同志が共演する機会となり、これまでに経験のない出来事だったという。「唐桑ものがたり」では劇団「夢の海」と郷土芸能 4 団体（のちに 5 団体）が同じ舞台に上がり、5 年間創作活動を共にするという、新たな試みであった。さらに、この活動の最大の特徴は、演者が小学生から若者・老人までの多世代で渡ること、衣装製作などでこれをサポートする婦人部をも巻き込んだ「演ずる、支える、観る」という幅広い活動であることが指摘できる。

5 年間の活動概要は表 7 のとおりである。ストーリーは、熊野神の勧請をベースにして、宴席の場面には七福神舞や浜甚句が披露され、漁の場面では大漁唄込が披露され、参加した郷土芸能団体が登場する。芝居は、劇団「夢の海」のメンバーに加えて郷土芸能団体からの出演者とともに進行する。唐桑に伝わる逸話とともに宇宙人が登場するなど、コミカル場面や今日的な話題を織り込むなど、脚本の制作過程から各郷土芸能団体の代表が参加し一体感を創り上げたという。郷土芸能団体から芝居に参加した人たちは、当初セリフのある役を拒んだが、年を経るにつれセリフのある役を望み、小道具を自分で作るなど積極的に関わるようになったそうである。

12 月に気仙沼市内での公演および年度末に仙台市の出公演を行っていたが、活動 4 年目となる 2017 年 3 月には、熊野神勧請の船出をした和歌山新宮市三輪崎にて公演を行った。総勢 100 名近くの訪問団一行を迎える、三輪崎地区の人々の手作り交流会では浜甚句が始まると田岡新宮市長を先頭にした手踊りの輪が広がり、初めて会った人たちとは思えず、ルーツは同じと感じさせる盛り上がりであった。

表 7 :「唐桑ものがたり」公演概要（2013 年～2017 年）

公演内容		公演場所
2013 年度	「唐桑ものがたり～海の家族の棲むところ」	気仙沼・仙台
2014 年度	「唐桑ものがたり 海の古道 ～1300 年の旅～」	気仙沼・仙台
2015 年度	「唐桑ものがたり～クリスマスに花束を　祈りのまち・唐桑」	気仙沼・仙台
2016 年度	「唐桑ものがたり　海の古道～神々の記憶～」	気仙沼・新宮

2017 年度	「唐桑ものがたり 海の古道 ～1300 年の旅～」	気仙沼・目黒
主催・共催・後援・協力		
主催	気仙沼市文化遺産活用検討実行委員会 唐桑大漁唄込復活推進実行委員会	
共催	気仙沼市教育委員会／劇団「夢の海」	
後援	気仙沼市／三陸新報社／河北新報／リアスの風 気仙沼ケーブルネットワーク	
協力	特定非営利活動法人 SEEDS Asia	
出演団体	劇団「夢の海」、崎浜大漁唄込保存会、唐桑浜甚句保存会、 神止七福神舞保存会、鮪立大漁唄込保存会、松圃虎舞保存会 [13]	

出典：筆者作成

2018 年 3 月には、目黒区民センターホールで開催され、満員の盛況であった。目黒公演が実現したのは、毎年気仙沼で獲れたサンマが届けられ、焼き手も夜行バスで目黒へ駆けつける、気仙沼実行委員会の松井会長らが魚食文化普及のために始めた目黒のサンマまつりがきっかけとなっている。サンマの配付は、今では毎年 9 月に行われる目黒区民まつりの恒例行事となり定着している。「目黒さんま祭」が 15 回目を迎えた記念の年 2010 年 9 月 18 日に、両自治体は友好都市となりさらに絆を深めることとなった。その内容は、防災、地域振興、産業経済、教育文化など幅広い分野にわたり、2011 年の東日本大震災の折には、通常の災害支援活動に加え、「友好都市・気仙沼市被災募金」に直接寄せられた義援金は当初より 34 次におよび昨年末で総額 8 億 5,357 万 9,955 円が届けられ被災者に配分されている。目黒公演の前日祭として 1300 年前の熊野神勧請をメインのテーマに、歴史探訪フォーラム「黒潮に運ばれた道」を開催した。気仙沼市、目黒区、新宮市のからの交流の報告など地味なテーマであるにも関わらず、ほぼ満席であった。

これらのことが縁となり、2018 年 10 月 27 日に、新宮市と気仙沼市との間で、歴史・文化・産業交流都市協定が締結された。さらに、室根神社の新宮は、正和 2 年（1313 年)、陸奥の守護職である葛西清信が、奥七郡（磐井郡・江刺郡・胆沢郡・気仙郡・本吉郡・登米郡・牡鹿郡）の鎮守として、紀州（和歌山県新宮市）から、熊野速玉大社の御神霊を迎え祀ったものとされ、新宮市と一関市の交流も進んでいる。

[13] 松圃虎舞保存会は第 2 回公演より参加し、第 5 回公演から脱退

（３） 郷土芸能劇「唐桑ものがたり」が目指すコミュニティの再生

芝居の原作・演出を担当し劇団「夢の海」を主宰する栗原氏 は、多摩美術大学出身で東京の劇団で照明を中心に担当しており、奥様の出身地である気仙沼にＩターンした移住者でもある。古館家（鈴木氏宅）で崎浜自治会長の戸羽氏に出会い「唐桑ものがたり」のプロジェクトがスタートした。戸羽氏は、1988 年から開催された大漁旗のテントで覆われた「唐桑臨海劇場」[14]の副実行委員長であり、当時のまちづくり活動の主要なメンバーであり、唐桑町議会議員、合併後は気仙沼市会議員を務めていた人物である。

2016 年 2 月に栗原氏へのインタビューを行った。その中で印象的であったのは、次の 5 点である。①劇の脚本製作のためのミーティングからそれぞれの団体の代表が参加し、上演までの劇を創り上げる過程を通じて一体感を創り上げる、②これまで同じ舞台に立ったことのなかった大漁唄込などの郷土芸能団体が共同作業をすることにより共通の基盤を創る、③これにより新しいコミュニティが形成され、広く郷土芸能を伝える機会ができる、④被災した人と被災しなかった人達の共同作業であり、元のコミュニティ機能の回復に役立つ、⑤各仮設住宅に分かれて住んでいる元のコミュニティの人達をつなぐという明確な意図を持った活動である。

また、ストーリーには 1300 年前の熊野神勧請や鰹の溜め釣り漁法の導入、白鯨伝説 [15]などの歴史物語や伝承を織り込むとともに、2017 年の芝居には唐桑中学校に統合された小原木中学校で演じられてきた YOSAKOI の演舞を唐桑中学校の運動会の際に全校生徒で演じた [16]という身近で今日的な話題もストーリーに取り入れるなど、地域に密着した構成となっている。

郷土芸能や演劇が媒体となり人とひとをつなぎ、元のコミュニティを再生するとともに、コミュニティとコミュニティをつなぐという機能を発揮させる。これらの考え方は、SEEDS Asia の活動方針とも合致しており、大震災からコミュニティを再生させるために郷土芸能団体が保有するソーシャル・キャピタルを演劇という創造的な活動を通じて変革

---

[14] 1988 年 8 月 3・4・5 日の 3 日間

[15] 加藤（1994）によると、御崎神社には天保の飢饉（1836 年）の際に鯨が迷い込み、村人たちの飢えを救った際の鯨塚や完成 12 年（1800 年）暴風により難破した船を御崎明神の使いと名乗る白鯨が助けたとされる鯨塚が残っており、鯨を霊魚として崇めているとされている。

[16] YOSAKOI の演舞は 1 昨年の運動会から披露されたが、小原木中学校が保有する大漁旗の法被が全校生徒に渡らず、「唐桑ものがたり」をサポートする崎浜自治会婦人部が大漁旗の提供をインターネットで呼びかけ、自分たちで法被を縫い全校生徒に提供した

するという試みで、郷土芸能を見えざる復元力として積極的に機能させ、コミュニティを再生する活動である。

3.　大震災からの復元力としてのソーシャル・キャピタル

（1）災害復興のスピードを説明する6つの要因

D/P/アルドリッチは、表8に示したように災害復興のスピードを説明する要因として、①統治、②外部支援、③被害の大きさ、④人口密度、⑤人口動態・社会経済的な状況、⑥ソーシャル・キャピタルの6つを提示している。本節では各項目について、唐桑での状況を報告する。

表8：災害復興のスピードを説明する6つの要因

要因	仮設と想定	参考となる指標など
統治	より良い情報を持ち、より優れた 意思決定者は、復興を速める	・リーダーの能力 ・レントシーキングや汚職の有無
外部支援	支援の量が大きいほど、復興は速まる	・政府やNGOから地域へ提供される支援金、物資、専門家の数
被害の大きさ	被害が大きいほど、復興にかかる時間は長くなる	・死者、負傷者、家を失った人の数
人口密度	人口密集地域では、住宅ストックの置き換えが困難であることから、復興が遅れる	・1㎢あたりの人口
人口動態、社会経済的な状況	富裕層が多く、平均年齢が若く、多数派の民族が多くを占め、高学歴者の多いコミュニティであるほど、復興がより速い	・所得、学歴、人種、平均年齢、持ち家、経済的格差
ソーシャル・キャピタル	ボランティア意識やボランティアグループのメンバーシップが高く、信頼関係がより高い地域では、集合行動の問題が克服され、復興がより速い 同時に、社会の周縁部にいるアウトグループの人々の復興を遅らせる	・地域のボランティア組織の数 ・投票率 ・信頼とボランティア意識の水準 ・uur Panchayats（賢者会議のメンバーシップ） ・地域のイベントや祭りへの参加

出典：D/P/アルドリッチ『災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割とは何か』p19

①　統治

表9は、1988年から開催された「唐桑臨海劇場」の実行委員会メンバーの職業と年齢である。当時のまちづくりのリーダーたちは、現在〈表の年齢+30歳〉になっており、早い人は前期高齢者になっている。多様な職業などから判断し、唐桑を愛するまちおこしの活動をしていたと考えられる。

このメンバーから後の町長、町会議員（合併後は市会議員）、県会議員、観光協会長などを輩出したことから判断し、将来のリーダー育成機能を担っていた活動でもある。広域合併後の新市の体制が整う前に被災したため、行政の支援体制が整っていないにも関わらず、唐桑臨海劇場推進のリーダーであった人たちが、唐桑に支援に入った多数のボランテ

ィアの若者たちに触発され活動するという、気仙沼でも復興が早い地域であった。現在、唐桑まちづくり協議会ではボランティアに訪れ I ターンした若者と地元の若者による「からくわ丸」のメンバーが 3 つの分科会長を務めている。かつて唐桑臨海劇場をリードしてきた世代が、これまでのさまざまな経験と共感性により分科会長を委嘱した若者たちを成功に導き、将来の地域のリーダーとなるよう支援していく体制の構築が重要となる。

表 9：唐桑臨海劇場実行委員会メンバーリスト（年齢は当時年齢）

歯科医（37 才・男）	ブティック経営（33 才・男）	旅館経営（37 才・男）
ホテル経理課長（33 才・男）	役場職員（29 才・男）	漁協職員（37 才・男）
信用金庫職員（21 才・女）	美容師（19 才・女）	看護婦（26 才・女）
商工会職員（27 才・男）	電気店経営（35 才・男）	大工（29 才・男）
米屋（37 才・男）	トラック運転手（37 才・男）	塗装業（42 才・男）
観光協会職員（26 才・男）	水産加工販売（31 歳・男）	漁業経営（36 歳・男）
自動車会社員（28 才・男）	税理士（38 歳・男）	保母（26 才・女）
水道店経営（25 才・男）	喫茶店経営（33 才・男）	看護学生（19 才・女）
スポーツ店経営（36 才・男）	ガス・石油販売（41 才・男）	農協職員（33 才・男）
無線局勤務（35 歳・男）	ガソリンスタンド勤務(32 歳・男)	国民宿舎勤務（25 才・男）
縫製工場勤務（19 才・女）		

出典：唐桑臨海劇場実行委員会『'88 唐桑臨海劇場』（1988 年）

② 外部支援

外部からの多数の支援があったが、FIWC[17]により派遣された加藤拓馬氏は、ボランティア活動にとどまらず、唐桑の支援のために訪れるボランティアの調整のための組織を立ち上げた。さらに、その後に地元の若者を含めた「からくわ丸」を立上げた。唐桑の瓦礫処理は 9 月に終了したが、これは彼らによる活動とこれに触発された地元の人たちの活動を引き出したことによるところが大きいと考えられる。

③ 被害の大きさ

唐桑は海に突き出した半島のため平地が少なく浸水域は気仙沼、本吉にくらべ広くはなかった。しかしながら、山が海に迫る狭隘な平地に人口の集中した地域である大沢、只

[17] FIWC はフレンズ国際ワークキャンプ（Friends International Work Camp）の略称で、一般市民、学生による非政府組織（NGO）
3 月下旬に復興支援のボランティアチームを立ち上げ、その中心には、中国のハンセン病村のワークキャンプに参加して来た早稲田大学の人々がいました。卒業を目前にしていた 4 年の加藤拓馬君は、内定していた就職先から無期限の休職（？）をもらい、3 月から唐桑に「移住」して拠点を作っています。

越、宿浦、舞根、馬場、鮪立などに集中し家屋の被害が発生した。（表 10）家屋の被害は大きかったが、浸水域は狭かったために、ボランティアの力を借り集中して後片付けを行ったことにより、早く瓦礫処理が終了し、生業の再建に取り組むことができたが、高台移転のための造成などに時間を要した。その中で、高台の造成地で縄文遺跡が発見され、唐桑が古代より豊かな地であったことなど、地域の再発見につながる予期せぬ副産物もあった。

表 10：唐桑地域の家屋の被害状況

地区名	町名	全壊	大規模半壊	半壊	一部損壊	計	地区の棟数に占める被害の割合
中井	崎浜、松圃、中井、小鯖	211	9	19	98	337	14.3%
唐桑	中、鮪立、舞根、宿、石原	989	54	72	114	1,229	34.2%
小原木	只腰、館、大沢	664	26	15	62	767	47.8%
唐桑地域合計		1,864	89	106	274	2,333	30.9%

平成 23 年度第 4 回唐桑地域協議会資料より作成

④ 人口密度

前述のとおり、狭隘で人口の集中した大沢、只越、宿浦、舞根、馬場、鮪立などに被害が集中した。瓦礫の撤去が早期に完了したものの、高台移転のために山を切り崩し宅地造成をしなければならないために、唐桑地区の仮設住宅の解消には 2018 年夏まで要した。

⑤ 人口動態・社会経済的な状況

唐桑地区で特徴的なのは、人口減少に加え高齢化率が 39.5%と気仙沼市の中で突出していることである。

遠洋漁業の乗組員が多く、高収入の遠洋漁船に乗り組み入母屋式の唐桑御殿を立てることが男たちのかつての夢であった。これも二度のオイルショックと 200 海里規制などにより減船を余儀なくされ、唐桑の繁栄の象徴であった遠洋漁業も構造不況業種となり、唐桑は人口減少と共に経済的にも大きな変化に直面している地区でもある。

⑥ ソーシャル・キャピタル

浜の海沿いの平坦な土地に肩を寄せ合うような集落は結束力が強い結束型のソーシャル・キャピタルを形成していることが唐桑地域の特徴として指摘できる。したがって、外部からの支援の要因も大きかったが、地域が結束して復興に取り組み、気仙沼の中で復興がスピーディに進んだ地区であり、災害時の集団的なパニック状態なども報告されていな

い。

防潮堤問題についても、宮城県の提案に対し必要でない箇所、必要であるが高さを下げる箇所などの具体的な話し合いが早く進んだ地区でもある。

以上述べたように、唐桑の復興は他の地域に比べ順調に進んだといえる。次章では唐桑の復興を支えた結束型ソーシャル・キャピタル、橋渡し型ソーシャル・キャピタルに加え、第 3 のソーシャル・キャピタルが機能したことについて検討する。

（2） ソーシャル・キャピタルと復元力

アルドリッチ（2015）は、平常時と災害時におけるソーシャル・キャピタルの動きを表 11 の様に整理している。これにより唐桑の復興を説明すると、狭い地域では集落ごとのより高度な結束型ソーシャル・キャピタルが、住民間のより深い信頼とより広範な規範の共有へつながり、このソーシャル・キャピタルにコミュニティのリーダーシップと外部からのボランティアが加わり、コミュニティ再建への速度が速まったと考えられる。さらに相互信頼と相互依存により災害管理意識が高まり、災害への心構えを高め、集団での対応を促し、復興速度を速め、リスクと復興への順応力と集合的意思決定力が向上し、漁業の再開と防潮堤の取り組みも早かったのである。

表 11：平常時と災害時におけるソーシャル・キャピタルの働き

平常の働き	災害時の適用
強固なソーシャル・キャピタルは、ネットワークに属する人々へ情報や知識、また入手経路を提供する	社会資源は、災害後のインフォーマルな保険として、また相互支援の仕組みとして機能する
強い結束は、ネットワークのメンバー間に信頼関係を作り出す	強固なソーシャル・キャピタルは、復興や再建の妨げとなる集合行動の問題を克服するための助けとなる
ソーシャル・キャピタルは、コンプライアンスや参加に関する新しい規範を形成する	ネットワークは、市民の声を強め、退出の可能性を低下させる

出典：D/P/アルドリッチ『災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割とは何か』p65.

上記のように、結束型ソーシャル・キャ ピタルは、友人や家族など感情的に密な関係を分かつ個人同士のつながりを指し、特定の集団への強い絆へ帰結する。したがって、地域コミュニティ内の結束型ソー シャル・キャピタルは、災害時に精神的・心理的な支援に加え情報、救援や育児支援などの様々な相互支援の仕組みとして機能する。

これに対し、橋渡し型ソーシャル・キャ ピタルは、社会階層や人種などの枠を超えて

ゆるやかに結ばれている知人や個人の間のつながりを指す。このような橋渡し型ソーシャル・キャ ピタルでは、価値観を共有しているわけではなく、グラノベッター（1983）の「弱い紐帯の強さ」[18]という考え方に符合する。「三陸海の盆」への崎浜大漁唄込の参加などはまさにこれに該当する。遠野まごころネットのメンバーが気仙沼の知り合いに参加団体はないだろかと打診をしたところ、その方より戸羽氏に連絡が入り、大槌で開催された第 1 回へ崎浜大漁唄込が参加することとなった。さらに、戸羽氏が窓口となり彼のネットワークを通じ、2015 年に唐桑の御崎観光港で開催され、2018 年度の開催地を女川の知人に打診するなど、様々な郷土芸能団体とのネットワークが三陸一帯に広がっている。

そして第 3 のソーシャル・キャピタルは、連結型ソーシャル・キャピタルと呼ばれ、上部組織・団体との関係が垂直型のソーシャル・キャピタルで，社会的権力や権威の枠を越えてつながる人々の間に存在するもので、一般市民と権限を持つ者とを結ぶソーシャル・キャピタルである。次節では唐桑の連結型ソーシャル・キャピタルについて検討する。

（3） 唐桑と連結型ソーシャル・キャピタル

唐桑を語るうえで忘れてはならない名前としてハンセン病回復者の社会復帰に尽力した鈴木重雄（1911-1979）氏があげられる。鮪立の生まれで、東京商科大学（現一橋大学）に進学の後、ハンセン病を発病し、1936 年岡山県の長島愛生園に田中文雄の名で入所、処遇改善の自治会活動やハンセン病の啓発活動にも参加、1960 年代には FIWC の学生たちの「交流(むすび)の家」建設に愛生園の若者たちと共に参加するなど広範な社会活動に参加した。そして、これらの活動の中で培った官民、皇室をも含む幅広い人脈を駆使し、ふるさと唐桑町の漁業と観光開発に大きな貢献をした。それらの縁で FIWC は 2011 年 3 月下旬に復興支援のボランティアチームを立ち上げ加藤拓馬氏が、唐桑に派遣され「定住」し活動を行っている。

鈴木氏の唐桑での具体的な活動として、それまで否決され続けてきた唐桑半島の陸中海岸国立公園への編入、唐桑半島の先端に国民宿舎「からくわ荘」を誘致したことや半島全体への上水道の設備などがあげられ、これらは鈴木重雄氏自身の人脈により完成させたと

---

[18] スタンフォード大学社会学部教授のマーク・S.グラノヴェターが、“The Strength of Weak Ties” という論文で発表した社会ネットワークの概念で、家族や親友、職場の仲間といった社会的に強いつながりを持つ人々よりも、友達の友達やちょっとした知り合いなど社会的なつながりが弱い人々の方が、自分にとって新しく価値の高い情報をもたらしてくれる可能性が高いという考え方。

されている。その後、唐桑に戻った鈴木氏は、宮城県北にはなかった知的障害者の施設を遠洋漁業の船主たちの後押しで実現するなど、障害者福祉の面で唐桑に貢献した。

筆者自身の経験では、唐桑オルレの検討が開始されると、早速にオルレ先進地である九州へ視察に向かう共に、気仙沼市に相談するのではなく地元選出の県議を通じ宮城県の観光課と折衝し知事の裁可を取り付けたことなどが、唐桑人の物事に瞬発的に取り組む例としてあげられる。2016 年 12 月開催のコース選定委員会では、30 年前に作成した唐桑探訪マップを参考し、1 時間程度の打合せで 2 つのコース案が決まり、翌月の下見の日程までが決まるという速さである。県の観光課からは、宮城オルレ唐桑コースとし、他の地域でも検討したいとのプランが出され、2017 年夏には済州島の本部よりコースの認定を受けたものの、2018 年 10 月 7 日に気仙沼・唐桑コースとしてようやくオープンにこぎつけた。翌 8 日には奥松島コースがオープンした。このように唐桑では連結型のソーシャル・キャピタルが復元力として機能していることが指摘できる。

これらのことは防潮堤問題でも発揮され、鮪立地区の防潮堤の高さについて住民アンケートを実施し住民同士の話し合いを続け、県とも直接交渉し、当初計画の 9.9m から 1.8m 下げることに成功したことなどに表れている。気仙沼市内に比べいち早く決着し工事に取り掛かった。

しかしながら、こうしたソーシャル・キャピタルは万能薬ではなく、結束型には内部の結束が強すぎ、よそ者を排除し社会の寛容度が低下する、橋渡し型では他の組織とのつながりを求めすぎ元の組織のまとまりが弱くなることや、異なる組織との交流で文化や価値観の違いから誤解や対立が生じる危険性があることが指摘されている。連結型では権力者とつながりがある人や組織、つながりがない人や組織で権限や財源、情報面で不平等が生じる恐れがあることが指摘されている。

唐桑側はこれまでの単独の町であった時代の折衝方法を行っているにすぎないのだが、気仙沼側から唐桑はいつも声が大きいという批判も仄聞している。かつて町役場には顔なじみの職員がたくさんいた。何か困りごとがあれば役場に相談に行った。しかしながら、合併 10 年を経て住民はほとんどそのままであるのに対し。職員はほとんど入れ替わり、何事も気仙沼にある本庁経由で決済され時間がかかる。市役所のある内湾地区は、ようやく嵩上げ終了し新しい建物が出来上がり復興住宅や併設の商店街などが建設されつつあり、まさに復興の正念場を迎えているのに対し、唐桑は高台移転もほぼ終了し、早急に次の段階へ進みたいという復興の速度の違いが顕著になっている。大きな災害の後は、住民

は自身の足元のことに関心が高まることから、自身の住む地域への主張が強くなることはやむを得ないことなのかもしれないが、復興の遅れている地域に合わせなければならないというのはいかがなものであろうか。万能薬と思えるソーシャル・キャピタルにも負の側面があることを理解したうえで，それぞれの型のソーシャル・キャピタルを上手に醸成・活用することが地域力の強化につながると考えられる。

また、ソーシャル・キャピタルを機能させるためにも、均質化・画一化のアンチテーゼとしてのスローシティを目指すことの意義を理解しなければならないことについて付言する。

４．大震災からの復元力としての創造性

（１） 創造的復興

東日本大震災からの復興計画には、創造的復興という言葉が多用されている。岡田（2012）によると、1995 年の阪神・淡路大震災の後に、当時の貝原兵庫県知事が使用した言葉で、その意味するところは「単に震災前の状態に戻すのではなく、21 世紀の成熟社会にふさわしい復興を成し遂げる」と説明されている。

しかしながら、2015 年 1 月 3 日付神戸新聞には「創造的復興　本当の意味では実現せず」という見出しの特集記事が掲載されている。記事の中で、2011 年 4 月、首相官邸で開催された東日本大震災の復興構想会議に出席した貝原知事は、自ら掲げた復興の理念を、①破壊された都市機能の復旧、②失われた機能をよりよくする再生的な復興、その上で③近代都市文明の脆弱性を克服した新しい分権社会を目指した、と説明し「そういう意味で、阪神・淡路は創造的復興ではなかった」と報告している。また、記事中で震災後 20 年が経過しその評価は「街並みの復興は早かった」とする一方、成長志向の計画は被災者間の格差を拡大し「復興災害を招いた」とし、評価が分かれていることを報道している。

東日本大震災においても被災地の創造的復興が標榜されているものの、国家事業として高台移転、防潮堤整備、中心市街地の嵩上げと整備事業が行われてきた。2018 年 7 月 1 日に気仙沼市で「大震災からの復元力」というテーマのシンポジウムを開催したが、来賓の菅原市長は「国はレジリエンスという言葉を、国土強靭化と読み替えている」のではないかと指摘したのが印象的であった。

つまり創造的復興という言葉は、「創造性」や「創造的」という表現がもたらすアーテ

ィスティックでクリエイティブなニュアンスを響かせるが、震災前になかったものをつくるという程度の意味しか持たされていないようである。元通りにするという復旧に対して、多少なりとも新しいものを創るという程度の意味合いで、（創造的）復興というのが本音ではなかろうか。

注目すべきは貝原知事の発した新しい「分権社会」というキーワードである。神戸の復旧が本格化した 1995 年 5 月に「地方公共団体の自主性、自立性を高め、個性豊かで活力に満ちた地域社会の実現を図る」ことを目的に地方分権推進法が成立した。東日本大震災では、国は「市町村主体の復興」を掲げ、復興交付金で市町村の財源を支える体制となっているが、復興交付金の対象となるのは国が定める 40 の事業に限られている。菅原気仙沼市長は神戸新聞のインタビューに対し「現状では交付金をもらうため、制度に合わせる形で復興事業を進めている。理想とはあべこべの状態だ」と答えている。

（２） 復元力と持続的発展

管原気仙沼市長が「国がレジリエンスという言葉を国土強靭化と読み替えている」と指摘したことを紹介したが、被災地に住み続けるためには、物理的に安心・安全なまちづくり、つまり地震と津波に耐えうるハードのまちづくりが重要であることは間違いない。その意味で国土強靭化という考えは正しいといえるが、被災地に住む続けるためには暮らしやその暮らしを支えるための労働機会の創出が必要なこと、すなわちソフト面のまちづくりが欠かせないことについては異論のないところであろう。

しかしながら現実は、震災後急いで策定した（創造的）復興計画とそれに基づく復興事業は長期にわたりかつ広大な面積に及ぶ巨大な土木プロジェクトになってしまったのではなかろうか。

リチャード・フロリダは『クリエイティブ都市論』の中で、2005 年 8 月末にアメリカ合衆国南東部を襲った大型のハリケーン“カトリーナ”の被害からの復興について「堤防の強化や中心的な商業地区の再興、住宅の建設といったインフラ面の取り組みを急ぐあまり官民のリーダーはニューオリンズの住民にとって本当に必要なインフラの復旧を怠ってきた。彼らが求めているのは教会や酒場、バー、公園、学校といったコミュニティの核となる施設での人々の触れ合いである。これらの再興こそが、住民を呼び戻すカギなのだ。ニューオリンズが取り戻したいと思っているのは、要するに生活とコミュニティでの交流

なのである」[19]と述べている。また、真の充実感と幸福感を得るために必要なものとして最初にあげられるのは美的感覚と開放性とし、この 2 つはコミュニティにとり単なる余計な装飾物ではなく、必要不可欠なものであるとしている。

気仙沼市は 2012 年にスローシティを認証取得したが、このことは 2002 年からは全公立学校で ESD[20]がほどこされていることと無関係ではない。さらに、魚食健康都市宣言やスローフード都市宣言、プチシェフコンテストなどの地道な活動を積み重ね地域の多様な関係先が連携し、全国に先駆けて環境問題や防災に取り組んできたことが、日本で最初のスローシティ認証につながった大きな要因であると考えられる。

スローシティは、イタリアのオルヴィエト市、キアンティ市などスローフードに力を入れる街が、グローバリゼーションに伴う効率優先の画一化・均質化に反対する運動であり、多様性や感性などのスローフードの理念をまちづくりに反映させるとの趣旨で 1999 年に結成された。スローフード運動をベースに、グローバリゼーションがもたらす標準化や均質化、効率化により失われた街の個性や固有の文化や生活を守る、もしくは再興するという考えがこの運動の根本となっている。したがって、上述した名目だけの創造的復興に欠落している被災した生業や中小零細企業、地場産業の再生に加えて、地域の人々の暮らしを支える知識や思考などを体系化した人的文化資本と、地域の伝統、習慣などの地域的文化資本の継承と蓄積、これらをベースにして町を創造的に発展させるという、本来の創造的復興の考え方につながるのではなかろうか。

阪神・淡路大震災は、中央集権的官僚システムと大量生産・大量消費・大量廃棄システムと、大規模開発による道路、鉄路や港湾・空港などの交通網整備による、効率化の名のもとに国土の画一化・均質化を図ることからの転換を迫ることが、創造的復興の本来の意味ではなかったか。このことは菅原気仙沼市長の「東京の真似はしない」という言葉に象徴されるが、国土強靭化に名を借りた巨大な土木プロジェクトに化しているのではなかろうか。道路や堤防・建物は人間がその地で生活を営むためのツールでありハード面の必要条件であること、そのハードの上にその地で稼ぎ生活するというソフトが備わってこそ持続的な発展が期待されるのである。ただし、被害の甚大さから「自助」や「互助」・「共

---

19 リチャード・フロリダ著、井口典夫訳『クリエイティブ都市論』p218

20 Education for Sustainable Development の略。2002 年、「持続可能な開発に関する世界首脳会議（ヨハネスブルグサミット）」で、当時の小泉総理大臣が「ESD の 10 年」を提唱。国連第 57 回総会で採択、ユネスコが主導機関に指名され、2005 年から各国で取り組みが進んでいる。気仙沼市は幼稚園を含むすべての公立の学校で実施された日本での先進地域のひとつである。

助」のみでは解決できない問題であることも認識すべきで、持続的発展のために自立・自律するための舞台づくりが政策面での重要な仕事ではなかろうか。

（３） 創造性の視点からみた「唐桑ものがたり」

① 復元力として機能する郷土芸能

2,018 年 3 月 12 日付毎日新聞に「大震災 7 年　郷土芸能　心の復興には欠かせない」と題する社説が掲載された。復興は住宅や道路の整備だけでは成し遂げられない。地域の絆を取り戻す大きな力を持つ祭りや郷土芸能が消滅の危機にさらされ、岩手、宮城、福島の３県の 2000 件以上の郷土芸能のうち 800 件近くで伝承者が失われ、神社や用具が被害を受けたという趣旨であった。

このように東日本大震災以降、神楽などの伝統芸能や伝統的な祭りが持つ復元力が再評価されている。地域に伝わっている伝統芸能や伝統的なお祭りは、震災や津波を何度も経て伝えられてきており、自然の驚異に向き合うとともに自然を敬い、死者を弔い、残された者が自分の地域を再発見するとともに、その地で生き続ける源になっていることが再評価されたものと考えられる。堤防を高くしても、それを乗り越えて襲ってくる津波には勝つすべもなく、そうした自然の猛威に対し、社会の絆を取り戻す復元力として機能が再評価されていると考えられる。

② 創造の場

郷土芸能劇「唐桑ものがたり」は、上述の社会の絆を取り戻す復元力を備えた地域の郷土芸能団体が集り、唐桑の歴史や伝統を反映した「創造の場」として捉えなおすことができる。つまり、鮪立の大漁唄込は鮪立地区の絆を取り戻すための復元力として機能し、崎浜の大漁唄込は崎浜地区の絆を取り戻す復元力として機能したと考えられる。そしてこれらの団体が「唐桑ものがたり」のストーリーの中で、郷土芸能を演ずるとともに市民劇団「夢の海」メンバーと各郷土芸能団体からの演技者が一緒になり芝居を創造するという構造になっている。

「唐桑ものがたり」のもうひとつの特徴は、結束力の強い郷土芸能団体同士で構成され、個々の団体の意思で参加・不参加を選択できることとなっている。たとえば、松圃虎舞保存会は第 2 回より参加し、第 5 回から離脱するなど、いわば出入自由であるという緩やかな紐帯でつながっていると指摘できる。

③ 演ずる、支える、観る

かつて、スポーツの分野で、するスポーツから見るスポーツへ、そして支えるスポーツへという議論を行い、特に支えるという視点からボランティアの重要性などを議論してきたが、「唐桑ものがたり」においても同様の構造となっている。

唐桑地域の大漁唄込には、揃いの大漁看絆（かんばん）[21]を着用することがならわしとなっている。震災でそれぞれの地区の道具や衣装は流され、震災後しばらく間に合わせの衣装で唄っていたが、地区の婦人たちが大漁看絆を縫い、大漁唄込を支える活動を展開したことにより地区の絆は一層深まったと考えられる。

さらに、2015 年に唐桑中学に小原木中学が合併した際に、小原木中学校の運動会で演じられてきた YOSAKOI を新・唐桑中学校全体で踊ることとなった。ところが、小原木中学校で保有していた大漁旗の半纏に限りがあり、実際の演舞の際に下級生に半纏が支給されずジャージで演舞を行ったという。これを不憫に思った婦人たちが、インターネットを利用して大漁旗の提供を呼びかけ、自分たちで半纏に仕上げ、2016 年の運動会では、全員で大漁旗の半纏を着て YOSAKOI の演舞を行うなど、その活動は地域全体へ広がりを見せている。

これらに加え観る人の広がりを指摘しなければならない。表 7 に示したように、気仙沼公演に続き仙台公演を行い、2017 年 3 月には新宮公演、2018 年 3 月には目黒公演と観る人の広がりを見せている。仙台公演では、主に仙台で生活する唐桑に縁のある人たちが集い。新宮公演では 1300 年前の熊野神が船出をしたという歴史的な縁が、新たな交流へと発展し、2018 年 10 月 26 日の気仙沼市と新宮市との歴史文化産業交流都市の締結につながっている。気仙沼と友好都市提携をしている目黒公演では関東在住の気仙沼出身や演劇人が講演に加わるなど、その活動は被災者同士をつなぐ活動から、被災した人と被災しなかった人、被災しなかった人同士をつなぐ活動へと広がりを見せている。

④ ふたたび創造的復興について

「唐桑ものがたり」の公演は結束力の強い郷土芸能団体同士が、「唐桑ものがたり」という「創造の場」で新しい物語を創造する過程を共有し達成感や満足感など新たな喜びを手に入れる。そして、彼らが演じる「唐桑ものがたり」を観た人たちとの共感の輪が広がる。演ずる場所は、気仙沼市内から仙台市へ、そして新宮市・目黒区へと広がり、共感の

[21] かつて大漁の際に網元が配ったといわれる唐桑独特の長半纏。大漁唄込を披露する際に着用したが、津波で相当数が流され、各方面からの支援で反物を調達し、地区の婦人部のメンバーが手縫いで支援した。

輪をさらに広げるという好循環を形成し、その好循環を楽しんでいるかのようである。東北地方の方言で「おだつ」という言葉があり、「はしゃぐ。調子に乗る」ことを意味するが、まさに唐桑人はおだっているかのようで、被災し目先のことを優先しがちな環境の中で確実にスパイラルアップするという、コミュニティ・イノベーションを実現しているといえる。被災し自分たちのことを最最優先し近視眼的になりがちな人々が、自分たちが誇る郷土芸能をベースに新たな演劇を創造する。観客から称賛で自分たちの演劇活動に自信を持ち、さらに次の公演に向け励む。ステージは気仙沼から仙台・新宮。目黒と未知の場所に広がっていく。演ずる人びとたちの笑顔が絶えない。2016 年 12 月の気仙沼公演の際にアンケートを実施したが「あなたは、現在のご自身の生活に満足していますか？」の問いに対する回答は表 12 のとおりである。わずか 29 名からの回答であったが 90%近くが現在の生活に満足していると回答している。参考までに 2005 年の内閣府の「コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書」の比率を併記したが、その満足度の高さが理解できる。ちなみに回答者は、男性 23 名、女性 3 名、未回答 3 名の 29 名で、年齢が 25～29 歳 2 名、60～64 歳 2 名、70 歳以上 19 名、無回答 6 名となっており、高齢の男性の生活の満足度が高いことが示された。日本おいては高齢になるにつれ生活の満足度が下がる、しかも女性より男性が低いといわれているが、唐桑ものがたりに参加している高齢の男性は、被災しているにかかわらず生活の満足度が高いという結果となっており、内発的な創造的復興と位置付けることができるのではなかろうか。

表 12：生活の満足度

	2016年唐桑ものがたり			2005年全国	
	度数	%	累積率	%	累積率
1．非常に満足している	26	89.66%		2.60%	
2．満足している	2	6.90%	96.55%	35.97%	38.57%
3．やや不満である	1	3.45%	100.00%	36.00%	74.57%
4．不満足である	0	0.00%	100.00%	20.80%	95.37%
5.どちらともいえない	0	0.00%	100.00%	4.63%	100.00%
合計	29	100.00%			

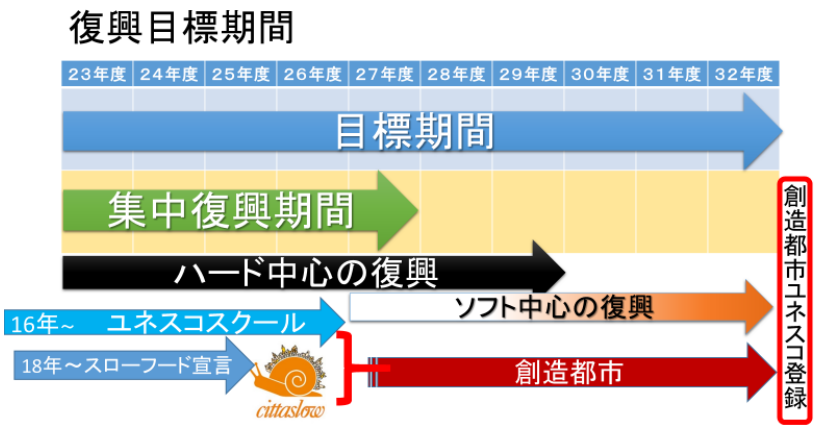
出典：筆者作成

（4） 創造都市の視点からの唐桑

① 復興のゴールとしての創造都市

2014 年秋に気仙沼市に、復興のゴールとして『創造都市』としてユネスコへの登録を提案した。[22]その概要は図 4 のとおりである。10 年間の復興目標期間の前半はハード中心の復興、後半はソフト中心の復興ということになろうが、気仙沼市は平成 16 年（2004 年）から ESD に取り組んでおり、公立の幼稚園・小中学校がユネスコスクール取り組み、2006 年にはスローフード都市宣言、さらに 2014 年に日本初のスローシティ認証を取得している。これらの取り組みがソフト中心の復興の基礎となっており創造都市としてユネスコへの登録を目指してはというものである。

図４：復興のゴールとしての創造都市



出典：筆者作成

創造都市を目指すべきとの提案は、①日本の創造都市（申請中、申請準備中）で水産業を主要産業とするところはないこと、②復興のゴールとして、創造都市としてユネスコ登録を設定することは市民の共通のイメージ形成につながり、さらに③気仙沼ブランドの向上、他の都市との差別化につながり、市民のシビックプライドの形成につながるとの狙いからであった。担当者は、当初スローシティを認証取得しているので必要ないとの対応であったが、スローシティの要件を備えているからこそ認証されたものであり、教育分野で推進してきたＥＳＤと政策面で実施してきたスローフード宣言の成果であり、これらを止揚して復興のゴールとしての創造都市登録をめざすべきではなかろうか。

② 創造都市について

ユネスコは、市場原理主義的なグローバリゼーションによる、途上国の文化財や言語が消失して文化権や人間発達を阻害と文化的多様性の毀損と文化的画一化に対することに対

[22] 当方の提案は、スローシティの延長線上に創造都市があるとの内容であったが、気仙沼市の担当者はスローシティの認定を受けており、これが復興のゴールと認識しているような印象を受けた。

する警鐘として 2004 年「創造都市のグローバルアライアンス」について提案を行った。参加を希望する都市は。文学、音楽、デザイン、メディアアート、映画、ガストロノミー、クラフトとフォークアートの 7 つの文化産業群の中から 1 分野を選択し、国（中央政府）に仲介してもらうのではなく直接、パリのユネスコ理事会に申請することとなっており、日本では 2008 年神戸市と名古屋市がデザイン分野登録し、2009 年に金沢市がクラフト分野で登録を行った。2013 年に創造都市の取組を推進する（または推進しようとする）地方自治体等、多様な主体を支援するとともに、国内及び世界の創造都市間の連携・交流を促進するためのプラットフォームとして創造都市ネットワーク日本（CCNJ）が設立された。

CCNJ を主導する佐々木は、「創造性」に関心を持った研究者の系譜について、文化経済学の創始者とされるジョン・ラスキンやウィリアム・モリスに遡るとし、創造都市の理論の系譜を整理し、「創造都市とは市民の創造活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に、脱大量生産の革新的で柔軟な都市経済システムを備え、グローバルな環境問題や、あるいはローカルな地域社会の課題に対して、創造的問題解決を行えるような都市」と定義している。

気仙沼市が ESD やスローフード宣言などの取り組みが評価された結果がスローシティの認証につながったとするならば、すでにスローシティであるわけで目指すべき目標ではなく、スローシティは創造都市への通過点と解するのが適当ではなかろうか。

次に、創造都市を発展させた創造農村という視点から唐桑地区についての検討を行う。

③ 創造農村

創造農村とは、住民自治と創意に基づいて豊かな自然生態系を保全する中で固有の文化を育み新たな芸術・科学・技術を導入し、個人的ものづくり結合による自律的循環的な地域経済を備え、グローバルな地域社会の課題に対して、創造的問題解決を行えるような『創造の場』に富んだ農村であると定義されている。（佐々木他 2014、p23）

表 13：創造都市と創造農村の比較

	創造都市	創造農村
創造性の源泉	芸術文化	生活文化
プレイヤー	市民	コミュニティ
経済システム	脱市場主義	地産地消
創造産業	アート、デザイン、工芸 メディアアート、文化観光等	農林業・工芸
社会包摂の対象	社会的マイノリティ	限界集落
インターフェイス	アート	日々の暮らし

出典：川井田祥子「漂泊的定住者がひらく創造的解決への扉」（佐々木他『創造的農村』p160）

表 13 は川井田による創造都市と創造農村の比較であるが、「唐桑ものがたり」にあてはめて考えると、創造性の源泉は大漁唄込という作業唄であり生活文化そのものであること、プレイヤーは鮪立や崎浜などのコミュニティ単位であること、経済システムは県道ができるまでは船を使っての交流で自給自足主体であったこと、郷土芸能の母体となったのは漁業であること、それぞれの集落は人口減少がとまらないこと、インターフェイスは地域そのもの、すなわち日々の暮らしであることを考慮すると、唐桑は「創造農村」ならぬ「創造漁村」と呼ぶにふさわしい地域である。

さらに、佐々木らによる創造農村の固有の条件を唐桑にあてはめると、表 14 のように整理できる。コミュニティの自治や創意工夫という点については、かつての若者たちのまちづくりカンパニーや震災を機に I ターンした「からくわ丸」の若者活動が当てはまる。豊かな自然と固有の文化という点については、明治時代からの植林による魚付林や「森は海の恋人」の活動やさまざまな郷土芸能があげられる。都市と連携した芸術・科学・技術やものづくりという点については、前衛劇団「黒テント」による「唐桑臨海劇場」や今回取り上げた「唐桑ものがたり」や入母屋式の唐桑御殿を造った気仙大工や船大工の存在がある。また尾根伝いの国道ができるまでは交通手段は船であり、近隣との狭い経済圏であり自律的な経済圏であった。このような点からも、唐桑地区は「創造漁村」であるととらえられる。

表 14：創造農村固有の条件と気仙沼市唐桑町

創造農村固有の条件	唐桑地域の状況
①村落共同体やコミュニティの自治と創意を重視する	まちづくりカンパニー、「からくわ丸」
②豊かな自然と生態系を保全する中で固有の文化を育む	NPO法人「森は海の恋人」 鮪立大漁唄込、崎浜大漁唄込、神止七福神舞、 只越七福神舞、浜甚句、松圃虎舞・娘手踊り、 前田沢打囃子・獅子舞など**多様な郷土芸能**
③都市と連携した芸術・科学・技術の導入と職人的　ものづくりの重視	唐桑臨海劇場、気仙大工（入母屋造り）・船大工、劇団「夢の海」、「唐桑ものがたり」
④自律的循環的な地域経済を備えている	昭和40年代尾根沿いの国道開通までの交通手段は船 浜毎に完結した自給自足経済と浜ごとの競争

出典：創造農村固有の条件（佐々木ほか 2014、p21.-22.）を参考に筆者作成

このような地区にＩターンの若者たちが「からくわ丸」という集団を立上げ、地元の若者たちを巻き込み活動を始めた。地区にはまちづくり協議会が設立され。彼らが主要な役職を担い、さらに創造性が発揮されるであろうことが期待されている。

おわりに

唐桑は、現代の日本社会が抱える共通の超高齢化・少子化、地域社会・コミュニティの崩壊という課題を抱えている。さらに、基幹産業であった漁業の衰退に伴う 2 次産業・3 次産業の低迷と人口流出による過疎化という経済の大きな構造的な変化に見舞われた地域でもある。この地域に津波が押し寄せ、気仙沼の中でも大きな被害を被った地域であるにもかかわらず、自立的な復興を目指し活動している。中でも注目したのは、多数の郷土芸能と郷土芸能劇「唐桑ものがたり」の存在であり、創造というキーワードで検討を行ってきた。

唐桑地区は、伝統的に遠洋漁業の乗組員が多く、最盛期には唐桑の漁師の 70％程度が遠洋漁業に携わっており、銀座には行ったことはないがシドニーやハワイなど世界の有名な港には行ったことがあり、ほとんどの漁師がパスポートを保有しているという。最盛期には住民の 70％が関係したという遠洋漁業の乗組員の養成・供給基地でもあった。前教育長の白幡氏からは、船を降りた高齢者の“死にがい”というキーワードを頂戴した。なるほど、“生きがい”と“死にがい”は裏と表のようにも思えるが、似て非なるもので超高齢化社会を言い表す的確な表現のように感じられた。

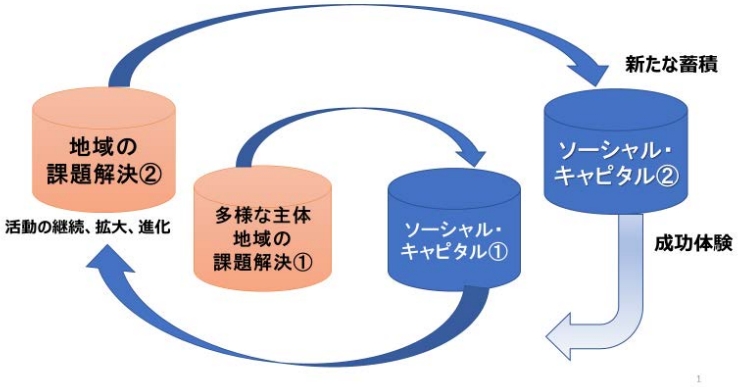
観光協会の三上氏へのインタビューの際に、よそ者・わか者・ばか者によって始まった「唐桑臨海劇場」の活動が「まちづくりカンパニー」の活動に発展し、バブルの崩壊により活動は停止せざるを得なかったが、制作した唐桑堪能マップが「からくわ丸」のまち歩き活動を受け入れる寛容性に繋がり、オルレの唐桑コース決定の迅速な決定に繋がったと

もいえる。「からくわ丸」の若者たちの行動が、高齢者の心に灯をつけた結果なのかもしれない。

以上、唐桑地域の際立った復元力ついて郷土芸能劇が創造の場として機能していることを中心に述べてきたが、将来世代に持続可能なコミュニティを引き継いでいくためには、現代世代がどのように考え行動するかにかかっている。これからの課題は、「唐桑臨海劇場」や「まちづくりカンパニー」が持っていた情熱やノウハウを引き継ぐことが重要であると考えるが、高齢者にありがちな単なる自慢話を繰り返すのではなく、なぜ失敗したのかについての総括が必要ではなかろうか。成功事例を参考にすることがよく行われるが、たとえば「まちづくりカンパニー」の失敗の理由を問われると、バブルの崩壊とともにと安易に説明されがちだが、他に決定的な要因を見つけ出し、その轍を踏まないことが成功への近道であり、失敗にこそ普遍性があるのではなかろうか。その上で「唐桑ものがたり」のような創造的な活動の場を、I ターンのよそ者と唐桑の若者で構成される「からくわ丸」などの若い世代などの多様な主体とともに地域の課題を解決する場として創りあげていくことがコミュニティの本当の意味での復興につながるのではなかろうか。

コミュニティ・ガバナンスとは、地域コミュニティにおける民主的なルールづくりに向けた活動をさすが、唐桑における多様な主体による地域の課題解決への取り組みを通じて共感と信頼のネットワークが強化され地域の課題解決へつながり、成功体験の蓄積がさらにソーシャル・キャピタル強化につながり、図 5 に示したようにスパイラルアップし地域の幸福度が増すであろうことを期待し論を終えることとする。

図 5 ：地域の課題解決とソーシャル・キャピタルの関係



出典：筆者作成

以上

【参考文献】

岡田知弘著「『創造的復興』論の批判的検討」(『現代思想』2012 年 3 月号、青土社、147-151 頁)

加藤宣夫著『古里零れ話　唐桑史談』1994 年.(自費出版)

石山修武著『世界一のまちづくりだ』、晶文社、1994 年.

D-P-アルドリッチ著、石田拓・藤澤由和訳『災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割とは何か一地域再建とレジリエンスの構築』、ミネルヴァ書房、2015 年.

佐々木雅幸著「創造都市への挑戦～産業と文化の息づく街へ」岩波書店、3001 年.

佐々木雅幸、川井田祥子、萩原雅也編著『創造農村―過疎をクリエイティブに生きる戦略』、学芸出版社、2014 年.

佐藤一子著『田園回帰⑦地域文化が若者を育てる―民族・芸能・食文化のまちづくり』農文協、2016 年.

早田宰、加藤基樹、沼田真一、阿部俊彦編著『ともに創る！まちの新しい未来―気仙沼復興塾』早稲田大学出版部、2013 年.

袖井孝子著『「地方創成」へのまちづくり・ひとづくり』、ミネルヴァ書房、2016 年.

アンドリュー・ゾッリ、アン・マリー・ヒーリー著、須川綾子訳『レジリエンス―復活力』、ダイヤモンド社、2013 年.

中山久憲著「創造的復興、そして持続可能な地域への復興へ」(『現代社会研究』第 3 号、神戸学院大学、2017、2-20 頁)

林　良嗣、鈴木康弘編著『レジリエンスと地方創成―伝統知とビッグデータから探る国土デザイン』、明石書房、2015 年.

松岡弘之著「ハンセン病回復者の社会復帰と宮城県本吉郡唐桑町」荒武賢一朗編『東北からみえる近世・近現代－さまざまな視点から豊かな歴史像へ－』岩田書院、2016 年所収

リチャード・フロリダ著、井口典夫訳『クリエイティブ都市論－創造性は居心地のよい場所を求める』ダイヤモンド社、2009 年.

リチャード・フロリダ著、小長谷一之訳『クリエイティブ都市経済論―地域活性の条件』、日本評論社、2010 年.

山岸俊男著『信頼の構造－こころと社会の進化ゲーム』東京大学出版会、1998 年.

【参考資料】

唐桑商工会『唐桑町商工会地域ビジョン作成事業報告書―唐桑ものがたり－10 年計画』、1989 年.

唐桑臨海劇場実行委員会『’88 唐桑臨海劇場』、1988 年.

唐桑臨海劇場実行委員会『’89 唐桑臨海劇場』、1989 年.

唐桑商工会「からくわ探訪シリーズ①　唐桑御殿」

唐桑祥子会「からくわ探訪シリーズ③　唐桑浜ものがたりマップ」

唐桑商工会「歴史の中の唐桑浜ものがたり」

神戸新聞「災の国～問われる「覚悟」～」（2015 年 1 月 1 日～13 日掲載）

北海道知事政策部「ソーシャル・キャピタルの醸成と地域力の向上－ 信頼の絆で支える北海道 －」（2006 年 2 月）

【参考 URL】

遠野まごころネットワーク HP　http://tonomagokoro.net/　2018 年 9 月 30 日

気仙沼市 HP　http://www.kesennuma.miyagi.jp/index.html　2018 年 9 月 30 日